平成１６年度英語教員指導力向上研修「授業改善プロジェクト」　　番号　16042

研究テーマ：　基本文の定着から英語で表現する力を向上させるための指導の工夫

所属　馬路村立魚梁瀬中学校
氏名　安岡　妙
ＲＧ　ＪＨ６

１　研究の背景

本校は、現在全校生徒 6 名（９月に 2 名の生徒が県外に転校）という小規模校である。生徒は、全体的に明るく活発であり、学習態度は落ち着いている。村の ALT が月に 3 回ほど来校し、TT の授業を行っている。3 年生は、4 月に転入生が来たことで初めて複数での授業ができるようになった。１人は学力が高く、理解も早い。もう１人は県外の大規模校からの転入生で、理解力はあるが、定着には時間がかかる。２人での授業ではあるが、よい雰囲気で学習ができている。そこで、実践的コミュニケーション能力の育成という観点から、学習したことがらをコミュニケーションの場で適切に使える力をつけたいと考えた。

２　リサーチ・クエスチョン

「学習した文型の定着を図り、表現力（話す･書く）を伸ばすにはどのように指導すればよいか」

３　予備調査

（１）　授業観察の結果

学習意欲があり、落ち着いた態度で学習に臨めている。コミュニケーション活動において、生徒同士で会話の継続をしていくことが難しい。また自信の無さからかワークシートに頼り、アイコンタクトが取りにくい場面が多くみられる。

（２）　英語学習意識調査の結果

全校生徒に実施した結果、英語を「聞く」「話す」「書く」ことが苦手で、文型・文法の理解や単語を覚えることにつまずきを感じており、会話力・英作文・聞き取りの力をつけたいと考えているということがわかった。

（３）　英語力を示すデータ（CRT）の分析（リサーチ対象の３年生のみ）

〈観点別得点率〉

	学　年	全　国	比　較
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	63.5	72.7	- 9.2
表現の能力	74.5	65.3	+ 9.2
理解の能力	67.5	65.0	+ 2.5
言語や文化についての知識・理解	79.0	60.5	+18.5

「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」以外は全国平均を上回っている。領域別得点率では４項目すべてにおいて全国平均を上回っている。

４　仮設の設定

仮説１　毎時間のペアインタビューを利用して、重要な表現を繰り返し使う機会を与えることにより、文型パターンを定着させることができる。

仮説２　教科書の英文を繰り返し読み、覚えることで基本文の定着が図れる。

仮説３　英訳問題に取り組むことにより、既習文型を使うことができる。（既習表現の定着）

仮説４　Q and A を実施し、単語（語句）による答え方だけではなく、語数を増やす指導をすることにより、表現する力が伸びる。

５　計画の実践

仮説１　主に ALT との TT の授業を利用して、新出文型を用いたコミュニケーション活動を実施した。また、日々の生活に関するペアインタビューを毎時間継続して行うようにし、会話の継続を意識させながら、単語だけの応答にならないように配慮した。

仮説２　CD や教師の音読の復唱、生徒同士の Shadowing、個人読み（設定時間内に何回読むことができるか）などを行い、音読の回数を増やし、Look Up Reading を心がけて行うようにした。

仮説３　1 学期には主に Explanation Game（ある事物についてペアで説明をしあい、何なのかを当てる）を実施。2 学期には自分の好きなもの(こと)、家事分担、将来の夢についての原稿を書き、スピーチ活動へつなげるようにした。

仮説４　教科書本文の読み取りや ALT の Small Talk の後などに、内容に関する Q and A を行った。

６　実践の結果

仮説１　インタビューの形式がワンパターンになってしまったが、基本文型を繰り返し使うことで文のパターンには慣れることができていた。しかし、インタビューの際に、モデル文を見ながら対話する場面が多かったので、使いこなすというところまではできていない。

仮説２　３年生になると教科書の英文が長く、内容が難しくなるため、楽しみながらやるというのは難しく、英文を覚えるというところまでには至らなかった。Look Up Reading には慣れつつある。

仮説３　工夫しながら英文でヒントを与えることができ、２人で協力して楽しみながらできていた。しかし、３年生レベルの英語表現はほとんど使われていなかったので、条件を与えて取り組ませるべきだったと感じている。スピーチ原稿作成では、文型の運用の仕方を確認することができ、既習文型を使うのに良い機会となった。

仮説４　What、Who、Where、When などの疑問詞の答えになる部分のみを言う傾向からは抜け出せなかった。文で答えられないかと言えばそうではないことが多く、投げ返しをすれば文で言うことができていた。単語やフレーズで答えても間違いではないが、Where や What time 等の質問には In や At などの前置詞から言うことを意識させたり、文でできるだけ言うように支援していくことが必要であると感じている。

７　結果の検証

ペアインタビューを毎時間継続して行うことによって、基本文が input されてきているように思う。いる。仮説３では取り組みを行うごとに手ごたえを感じることができたが、内容を見直す時間やスピーチの練習時間をもう少し取ることができれば、生徒自身が達成感をより多く味わうことができたのではないかと反省している。

【成果と今後の課題】

1 学期末と 2 学期末に実施した生徒の自己評価を比較したところ、顕著な変化は表れていなかったが、「質問に積極的に応答している」、「CD や話される英語を聞き取ろうとしている」、「習った英語を積極的に使おうとしている」という項目の評価が少しではあるが向上していた。また、2 学期末には「自分の言いたいことがだいたい書けるようになってきてよかった」という感想を書いてくれた生徒がおり、今回の取り組みが徐々にではあるが、成果として表れつつあるのではないかと感じている。しかし、他学年には単語がなかなか覚えられずにいる生徒がおり、何とか手立てをし、確かな英語力をつけなければならないと考えている。これからも学習の積み重ねを大事にし、授業の中でどんな力をつけたいのかを意識しながら、授業作りに取り組んでいきたい。